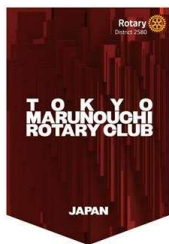


東京丸の内ロータリークラブ

2020年9月30日 第60回 例会議事録



「笑おう---好奇心と実践---」
Laughter
-through Curiosity and Participation-

2020-21 年度 クラブ会長
嘉納英樹 Thurgood Kanoh



T O K Y O
MARUNOUCHI
ROTARY CLUB

Club of Tokyo Marunouchi

“Rotary Opens Opportunities”

2020-21 国際ロータリー会長

ホルガー・クナーク

「ロータリーは機会の扉を開く」

2020-21 第 2580 地区ガバナー 野生司義光



【式次第および議事録】

1. 司会進行 今井 菜美子 幹事
2. 開会点鐘 嘉納 英樹 会長
3. 四つのテスト 高木 元太 会員
4. ゲスト・ビジター紹介 玉木 仁 直前副会長

・加藤 智紗 様
(卓話者、フレイアジャパン株式会社 CEO)

5. ニコニコ報告 鷺澤 充代 会計

・尾崎由比子直前会長

6. 会長報告 嘉納 英樹 会長
7. 幹事報告 今井 菜美子 幹事

・理事会報告 他

8. 出席報告 寿原 裕美子 会員

・出席者:7名、欠席:2名
・出席率:77.8%

9. 卓話 【右および次ページ参照】

10. 今後の予定 尾崎 由比子 直前会長

11. 閉会点鐘 嘉納 英樹 会長

12. 写真撮影

【卓話】

フレイアジャパン株式会社 CEO

加藤 智紗 様

「ロータリー留学生だった私」

(以下、加藤様)

今日はお招きいただきまして、ありがとうございます。
フレイアジャパンの加藤と申します。よろしく願いいたします。

私は1985年から86年の間に高校生の時に留学生交換プログラムというもので、ロータリークラブの方にお世話になりまして、アメリカの方に1年間留学させていただきました。私が派遣された交換留学生の場合、学生の方がどちらに行きたいですという希望ができず、ロータリークラブの方で、相手方のクラブの方から交換の学生が出せる地域に派遣される形になります。私が派遣されたのが、アメリカの中でも日本のみなさんにはあまり馴染みのないニューメキシコ州というところでした。ほとんどの方がご存知ないと思いますが、今はトランプ大統領が問題視されている、メキシコ国境沿いの州の1つになっています。州都はサンタフェ、最大の都市はアルバカーキというところになりまして。面積自体は全米で5位、土地だけはあるという州になります。この全米5位の広さに人口約200万。これでも全米第36位の都市になります。下の写真のように、広陵とした土地の中に町がぽつん、ぽつんと点在しているような州です。右写真がサンタフェになります。メキシコ時代の面影を残すような建物が多くありまして、アルバカーキの方では全米で最大のバイオフィスティバル。熱気球のイベントです。こちらの祭りが年に1回行われているようなところで、町おこしをしています。

私が派遣されたのはニューメキシコ州の中でも、最大のアルバカーキという町ではなく、ルイドソという、どちらかと言うとテキサスのエルパソという州、町から行った方が早い、地図で言うと下ですね。そちらの方から3時間の山間にある小さな、今でこそ町になっていますが、私がいた頃は村でした。こちらの地図で見いただくと、ロ

ッキー山脈の本当に麓になります、シエラ・ブランカサクラメント 山脈の終わりのところにあります。こちらを通常ニューメキシコというのはアリゾナ、ニューメキシコ州、テキサスってわりと広陵としている中で、ロッキー山脈の終わりのところに、麓にあるというところで、山になっています。ですので、広陵とした州の中でも、緑の多い木々に囲まれた山間の町になっていました。その関係上、この州では珍しいスキー場もございましたし、シーズン中は競馬場、ルイドソダウンズという競馬場もありました。それに付随して、ホテル、カジノ等があるリゾート、あまり馴染みのないアメリカインディアンです。ニューメキシコの場合はメスカレロアーパッチというモヒカン族なんかと例えられる、わりと勇猛で残忍な種族ですね。こちらの居住区がすぐありましたので、ハイスクールにも実際このアーパッチ族の学生さんたちも同じ校区に通っておりました。

(モニター)こちら、私が1年間通いました地元の高校です。ルイドソウォーリアーズハイスクールです。アメリカの学校の場合というのは必ず、このようなマスコット。スクールマスコットというのがありました。(写真)こちらが本当に映画とかで出てくるようなアメリカのハイスクールの入り口。下に普通のマーチングバンド。なぜこの写真を入れたかと言いますと、私がこちらの大学に編入した際に普通の音楽の時間の代わりに、こちらのスクールバンドの方に入っており、毎日、朝1年間スクールバンドの練習をしていました。アメリカのスクールバンドってというのはかなり層が熱くて、実際1番メイン、目立つ出番というのがアメリカン・フットボールのハーフタイムです。そこに、チアリーダーの他の応援として、このような形でパフォーマンスいたします。アメリカン・フットボール、それから花形のスポーツです。バスケットボール、そういう時に出演が、出ますけれども。その他に専門で全米のマーチングバンドコンテストというのがありました。私がいた時にこの州の3Aというクラスで一応優勝させていただいた、マーチングバンドになります。

次に、現地のハイスクールの方に編入して、日々アメリカな暮らしを送っていたかと言うと、そうではありませんでした。実際ロータリーで行かせていただいておりますので、ロータリーの交換留学生としての役割がきちんと、課せられていました。後でご質問が出てくると思うのですが、まずロータリーの交換留学生として日本からアメリカに派遣される場合に、日本側で事前にオリエンテーションがあります。これは、大体派遣が決まり、留学半年前ぐらいから、日本に来ている留学生とのオリエンテーションになります。私の場合は名古屋東ロータリーの方から派遣されておりましたので、名古屋というか東海地区でした。派遣されている交換留学生のみなさんと、それから次の年、私ども派遣される日本側の政府が一緒になりまして、軽井沢の方で強化合宿のようなものを行いました。そこでまず、外国の人と触れ合うということに免疫をつけて、こういうオリエンテーションが2回ほど、出発前にありました。そして、出発前に派遣させていただく名古屋東RCに出発のご挨拶に伺いました。当然帰国した後も、どういう1年だったかというご報告をさせていただいております。

また、アメリカの方の受け入れクラブには、毎週の例会に留学生として、参加を義務付けられていました。このおかげで、その時間帯にやっている授業の成績が著しく悪くなってしまいました。。あと、3ヶ月に1回ごと

ですが、派遣されている地区(現在の1520地区)の留学生全員とディストリクトの中の1つの町に集まりまして、週末金土日と一緒に過ごしていました。そこで“うちのホストファミリーはこうだ”とか、留学生同士の悩みなどの情報交換等をしていました。今日、記念品として持ってきましたが、そのような交換留学生の集まりの時に自分たちが自国から持ってくる各国を象徴するピンがあります。このピンを交換します。これがやはり、ロータリー交換留学生の1つのステータスというか、このジャケット自体は派遣される際にロータリークラブの方から支給していただいて。何十年も経っていますは、これだけは本当にどこに行くにも、引っ越すにも捨てられない、お金では買えない記念のものだと思っております。

また、私が派遣されていたルイドソという町ですが、実は設立されて初の日本人が私でした。ということで、私が町に住み始めてから、町の新聞社の方が取材に来られてまして、“初の日本人が来た”という記事になりました。その記事のおかげで地元の小学校、婦人会などにご招待いただいて、日本ってどういう国かということを紹介させていただきました。(写真)このタレントショーというのはハイスクールです。高校の中で自分が持っている何か才能を発表してくださいという発表会です。私は大した才能がなかったので、ここで君が代を斉唱いたしました。それから町の独立記念日パレード(7月4日)の際には、オープンカーに乗りながら、着物を着て、町の中で行進させていただきました。他にも、ホストファミリー、それから高校で仲良くなったお友だちの家に呼ばれると、日本料理を作り、紹介していました。1つのホストファミリー、私は3ヶ月ごとにきっちり4軒ホストファミリーでしたが、1軒の家族が梅干しを大好きになりまして。それからずっと梅干しを食べているという話は聞いています。

ロータリーの留学生として、1年間、学んだことに関してもですが、アメリカという国で生きていくために仕込まれたことも含まれます。まず、日本人が苦手なイエス、ノーをはっきり言うこと。アメリカに着いた時、“どちらでもいいです”とか、英語で言うとMaybeってたぶんってこんな言葉しか使っていませんでした。その度にカウンセラーや、ホストファミリーから、“イエスなのノーなのどちらなの?”と半年ぐらい毎日言われ続けました。後半になり、イエス、ノーをはっきり伝えるようになりました。あと、先程も申し上げましたように、1年で4軒のホストファミリーにお世話になりましたので、その家庭それぞれにいろいろなルールがありました。また、学校も日本の高校と比べて、随分勝手も校則も違います。そういう意味での環境適応能力の向上、これが後々大人になって非常に役に立ったなと思っております。

私が派遣されたのは17歳でした。出発の際、成田からシアトルまでは50人の日本人の交換留学生と一緒に行くのですが、シアトルで市内観光して1泊し、そこからは派遣場所まで全部1人です。JTBの方も誰もついていません。私の場合、シアトルからフェニックス経緯でエルバソ着でしたが、まず、フェニックスで乗り換えをしなければいけない。英語が話せない17歳の自分が乗り換えをできるのか。そこでも大泣きするアクシデントがいろいろありました。そういうことを経験したおかげで、メンタル的な強さ、状況を打開するべき粘り強さですね。黙っていては誰も助けてくれません。空港でいくら泣いてい

でも、アメリカ人はわかりません。日本の方は文化として、相手を察するということができる文化ですが、アメリカ人は助けてと声を上げなければ助けてくれない国民性です。やはり、自己主張もそうですが、自分から発言する。こういったものを会得することができました。1年間ハイスクール、それから4軒のホストファミリーというところで、先程も申し上げましたようにそれぞれのお家のルール。それから、高校の教育制度ですとか、勝手の違うところ、こういったところを日々1年間過ごすことでただ知る、知識として知るのではなく身についたと思います。高校生の頃からアメリカの場合、授業の中でディベートが盛んでございまして。やはり自己主張が強い国です。この授業を通して、プレゼントとかディベートのスキルというものが上がっていく。こういったところを会得したと思っております。

ここで、私のホストファミリーの一部をご紹介させていただきます。(写真)こちらは女性陣ですけれども、ニューメキシコはアメリカの地域区分で言うと、サウスウエストというエリアになります。絵に描いたようなカーボーイですね。男性の方はこういう方が多いです。土日もお友だちができる前はやはりホストファミリーとよく行動を共にしていましたので、連れて行かれるところがロデオの会場でした。1日ロデオを見ていると。この方々って本当に1年中こんな格好をしています。

今回卓話にお呼びいただくということで、(写真)私がこの家にお世話になった時、彼は小学校4年生でしたが、インタビューしてきました。現在、彼は弁護士になりまして、アルバカーキに住んでいます。彼のコメントとしては“留学生として、また自分が持っているたった1人の姉として、自分の人生にすごく影響を受けました”と。その影響は何かと言うと、自分が住んでいた、私が派遣されたルイドソという町ですね。“閉鎖的な町だったので、その町以外知らなかった小学校4年生の自分が、やっぱり日本という広い国、違う国があって、世界って広いな”と。“やはり日本人の姉を持ったことで、日本の文化を知ることができたし、さらに知りたいと思えるような、そういう好奇心や興味を促進、推進してくれた”。(写真)こちらはハイスクールですね。お友だち、本当のお友だちができるまでに数ヶ月、言葉の壁もありましてかかっていますが、大の仲良しになりました。特に彼女とはまだ頻繁にやり取りがあります。彼女にも一度訊いてみました。“なんで私に声をかけてくれて、私の面倒をいろいろ見て、仲良くしてくれたのか”と。数十年目で初めて理由を聞きました。彼女のコメントは、“自分たちの町に初めて日本人の留学生が来て、ハイスクールで見た時にこんな小さな田舎の町に1人で来るなんて相当勇気のある人だなと思った。そんな勇気がある勇

敢な人と友だちになりたいなと思って、声をかけた”と。他に、彼女が持っているハンカチ。これは私自身もちょっと記憶がないのですが、彼女に日本のお土産の1つとしてプレゼントしたものです。数十年経ってもまだ、引っ越す時ですらこの何十年も経ったこの品を持ち歩いてくれているそうです。このコメントとこの写真が送られてきた時に感激してしまいました。こんな国をまたいだり、文化を越えたり、または性別を越えたり、そういう中でも家族と呼べるような人とか、親友と呼べる人が得られたこと、これは本当にロータリーの交換留学プログラムのおかげだと思っております。

残念ながら、ロータリープログラムというのが1年の派遣ですので、正直私が英語を話す時に頭で考えずにネイティブのように英語で話せるようになるまでに実際9ヶ月かかりました。3ヶ月ぐらいでなんとか頭の中で文を組み立てて、会話をすることはできますが、本当のアメリカ人のように英語で脳が理解して、英語で口からさっと何も考えずに出るというのは9ヶ月。1年が12ヶ月ですので、ほぼ帰国間近にしか、そのレベルに達しませんでした。日本人が誰もいない、1年間日本語を喋って、喋れない状況でも17歳から18歳の脳でも、9ヶ月かかりました。その後、帰国し、そこでやはりせっかくこの身についた英語力をここで忘れてしまうのももったいないなと思っていました。実は、ロータリーの留学プログラムで留学させていただいている間に、3月のスプリングブレイクの間にカウンセラーを説得しまして、実際アメリカの大学の見学も行かせてもらいました。この理由というのが、ハイスクールの方でアメリカの場合はSAD、大学進学適性テストというのを受けます。実際、たまたま、好成绩でした。英語の問題だけクリアできれば、通常の州立大学であれば入れる、軽く入れるレベルのスコアでした。“これだったら、大学にそのまま進学しようかな”ということで、アメリカの大学をいろいろ探すことになりました。結果的に、私その当時寒いところが嫌だったので、そうなりますと全米の半分がまず消えます。カリフォルニアのようにアジア系の留学生が多いところは嫌だなということで選んだのが、フロリダのタンパという町にあります。ユニバーシティオブサウスフロリダです。こちらは本当に日本人が少ない学校です。おかげでその後もメキメキと英語のレベルが上がりました。こちらの楽しみというのは、NFLのプロフットボールのチームがあり、試合も毎週行っていて、応援していました。

大学を卒業後、これもロータリーのおかげですが、ロータリーの5520地区に派遣されていた時に来ていたスウェーデンの男性の方とご縁がありました。(派遣の時は男女交際禁止でした。)そこからずっとやり取りをし、めでたくというか、結婚まで至り、それを機にスウェー

ンのヨーテボリに移住しました。ロータリー、そういう意味ですごく人生を変えていただいたと思っています。(写真)このスウェーデンのヨーテボリ。スウェーデンもなかなか日本の方にそれほど馴染みがない国ですけども、やはり福祉国家でもありますし、このヨーテボリという町は実は歯ですね。歯科の分野で歯科インプラント。こちらの方を初めてチタン製で作ると、行くと、拒否反応がない、生体性が良いというものを発見した教授がいる大学がございいます。そのせいかヨーテボリというのは歯科医院、インプラントをされる先生にとってはメッカになります。そういった意味で、わりと医療も発達している国になります。こちらでもともと今現在行っている医療関係のお仕事にスウェーデンの方で入らせていただきました。まず、スウェーデン語と英語で医学用語を覚えなければいけないというので、“17歳から私の人生、ずっと勉強だらけだな”という感じがするんですけども。そのおかげで、医療の知識、それから経験を積み重ねていくことで、その後アメリカのシリコンバレーになります。シリコンバレーというのも、ベンチャー企業もとても多い地域。こちらの方にも、ベンチャー企業の医療機器ですね。大体開発者がスタンフォード出のエンジニアで、そういった方々が作り出す最新先進の医療機器。こちらを日本の方で扱う、日本支社の人間として長年従事させていただきました。

やはり、外資で働けた理由の1つが、実際本社の人に、“英語だけを喋る人だったらたくさんいる”と。“君を選んだ理由というのは、日本の文化のことも分かっている、我々のメンタリティ、アメリカ人のメンタリティやアメリカの文化も分かっているから、意思の疎通がしやすい。仕事しやすい。”と言われたことがありました。これもやはり、ロータリーで1年間さびしい思いもしましたし、流した涙の分だけ得たスキルだと思っています。

何十年とこういう業界におりますが、会社員を勤めさせていただいた後に、4年前ですが、自分で会社を設立いたしました。今現在は第2のシリコンバレーと言われているイスラエル、こちらの医療機器の会社の代理店をメインにさせていただいております。医療機器というのもいろいろあるのですが、現在私どもの方で力を入れているのが幹細胞を主とした再生医療ですね。実際、こちらがご自分の体でいらないところに、やはり好ましくないところに脂肪というのが年齢とともについてくるのですが。この脂肪を壊さない。そのまま採取して、レーザーを当てて取りやすくして、壊さないまま取って、それを体に戻すという、こういう機械。これ先端ですが、こちらの方のお取り扱いをさせていただいております。実際こちらのピンパッチにある国の何人かというのは実際まだやり取りが続いています。日本はやはり人気がありますので、家族で日本に来た時に何十年振りの再会を果たしています。そういったことで、グローバルな人生を送らせていただいていると思います。それも、やはりロータリーの交換留学のプログラムのおかげだなと思っています。ありがとうございます。

【質疑】

Q(尾崎): 青少年交換の学生を預かってほしいというような話がありますので、近々にお預かりするようなことになるかと思います。1年間で4家族のところに行かれたということなのですが、こういう家族だったら良かったのかな。受け入れる側としてはどのようなことに気をつけたらよいでしょうか。

A(加藤): 日本人がわりと小さな家からアメリカの家に行くのは逆に簡単です。どこのお宅も広いので、自分にあてがわれるお部屋というのも広がったですし、日本の場合住宅事情がまず1番難しいのかなと拝察いたします。ただ、条件としてはたぶん、欧米の方って子どもの頃からものすごく自立心をつけるように育てられていますので、どうしてもお部屋だけは自分のお部屋を1部屋確保できるような受け入れ先があることが、まず望ましいかと思います。あとですね、私が日本人もいない史上初の日本人の私がやはりホームシックになるであろうと、ロータリーの中でもカウンセラーがついてくれました。そのカウンセラーがしてくれたことですが、隣の隣町ぐらいのところに日本に少しだけ行っていたことがある人がいるというのを探してくれてきて、日本の思い出とか、ちょっと片言の日本語だったんですけどもそういうものを話して。その話すことで、ちょっとホームシックを和らげようというような配慮もしていただきました。現在はテクノロジーもすごく進化していますので、自分のご家族とフェイスタイムとかもできますし、SNSもこれだけ繋がっているの、あまり極度なホームシックにかかられる方はいらっしゃらないとは思いますが、もしそういう傾向が強い学生さんの場合は直に会って、そういうことができる。たぶん、1番自分が精神的にもどかしかったのは、言いたいことはたくさんあるのに、言葉がそこまで流暢じゃないので、100%伝えたいことの最初ってやっぱり最初の3ヶ月は10%ぐらいしか伝えられない。それがもどかしくて、もどかしくてストレスに変わっていくので。そこを発散して差し上げることができればと思います。あと、日本の方はやはり察することができますし、思いやりもございいますし、親切な国です。ただ、それが欧米の方の場合、構いすぎになる場合もあります。ですので、程よい距離感。1番ゲストも望ましいのは、彼らがやはり救いを求めてきた時、サポートがほしいとか助けがほしいと言った時にパッと受け入れて、それに対応して差し上げられる体制だけ取っておかれる方がよろしいかと思います。参考になれば、幸いです。今日はありがとうございました。

◆作成 : 今井